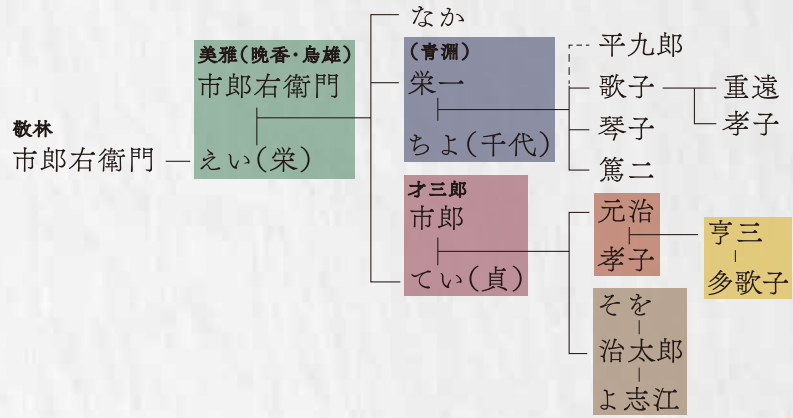


「中の家」家系図と人物等紹介



渋沢市郎右衛門と 栄 (Ei)

市郎右衛門(元助)は、「東の家(ひがしんち)」から「中の家」へ婿入りした。質素倹約に努め、持ち前の勤勉さで農業に励み、藍玉製造の名手として、「中の家」を再興した。えいは、大変慈悲深く、福祉事業にも多く関わった栄一に大きな影響を与えた。



藍玉



渋沢市郎と てい (Tei)

ていは、明るくユーモアにあふれる人柄で知られ、兄の栄一に代り、「中の家」をよく守った。親戚の須永家から婿入りした市郎(才三郎)は、勤勉誠実に家業の養蚕に励んだほか、八基村長、県会議員を歴任、小山川の治水や八基信用組合の設立にも尽力した。



渋沢元治

市郎・ていの長男。東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業し、欧米留学後、通信省へ入り勃興期の電気事業の監督行政に携わり、電気事業法の確立に貢献した。また、工学博士として東京帝国大学教授、名古屋帝国大学初代総長を歴任した。退官後は「中の家」で晩年を過ごした。

渋沢治太郎

市郎・ていの次男。郷里を離れた兄の元治に代わり「中の家」を守った。蚕業界、倉庫業界で活躍したほか、八基村会議員、埼玉県会議員、八基村長等を歴任。耕地整理組合や青淵図書館の設立など、産業、政治、教育など多方面で地域の発展に貢献した。



渋沢国際学園

元治の子、亨三とその妻多歌子は、「中の家」を渋沢栄一の生地として、ふさわしい形で活用したいと考えた。志半ばで世を去った亨三の遺志のもと、多歌子は昭和60(1985)年に「学校法人青淵塾渋沢国際学園」を設立。平成12(2000)年の同法人解散までに43か国、679名の留学生が学んだ。



休み時間

教室

「中の家」の建物

「中の家」の建物は、主屋を囲んで配置されています。



1. 正門・青淵翁誕生之地碑 (幸田露伴書)



2. 主屋



3. 副屋



4. 土蔵I



5. 土蔵II



6. 櫓の木



埼玉県指定旧跡「渋沢栄一生地」 住所 深谷市血洗島247-1
 開館時間 9:00-17:00 (入場は16:30まで)
 休館日 年末年始 (12月29日-1月3日)
 電話 048-587-1100 (渋沢栄一記念館)



旧渋沢邸「中の家」





「中の家」とは

この屋敷は、渋沢家の住宅等として使われてきたもので、通称「中の家(なかんち)」と呼ばれている。渋沢一族はこの地の開拓者のひとつとされるが、分家して数々の家を起こした。「中の家」もその一つで、この呼び名は、各渋沢家の家の位置関係に由来するものである。

主屋を囲むように副屋、土蔵、正門、東門が建ち、この地方における養蚕農家屋敷の形をよくとどめている。



渋沢邸「中の家」全景



渋沢栄一と「中の家」

栄一が23歳までを過ごした「中の家」は、茅葺屋根の主屋だった。明治時代に家業の中心が養蚕になると建替えられた。その主屋は明治25(1892)年、火災で失われ、明治28(1895)年に現在残る主屋が上棟された。

晩年の栄一は、幼少期に自身も親しんだ血洗島獅子舞の観覧を楽しみに、獅子舞が奉納される諏訪神社の祭礼にあわせて帰郷して「中の家」に滞在した。東京飛鳥山の栄一の私邸は、空襲によって焼失したため、この家は現在残る栄一が親しく立ち寄った数少ない場所といえる。



渋沢栄一「中の家」にて(昭和2年)



血洗島獅子舞



「中の家」の歴史



「中の家」主屋前集合写真(大正末～昭和初期)



「青淵翁誕生之地」と元治『五十年間の回顧』より



渋沢国際学園時代の「中の家」(昭和60年以降)

「近代日本経済の父」と称される渋沢栄一を生んだ「中の家」は、当主が代々市郎右衛門を名乗る、畑作や養蚕を営む農家であった。栄一の父、市郎右衛門(元助)は、藍玉の製造・販売を家業の中心に財産を築き、「苗字帯刀」を許されるほど裕福になった。

栄一が家を出たため「中の家」を継いだ市郎は、栄一の代理者として家を守ることを使命と考えた。そして、主屋を建築した際には、帰郷した栄一が滞在する1階奥の上座敷(かみざしき)の上部には蚕室を設けず天井を高くし、上質な木材を用いるなど、栄一がくつろげるように特に念入りにつくった。

また「中の家」は、元治、治太郎という人材を輩出した。昭和60(1985)年からは「学校法人青淵塾渋沢国際学園」の学校施設として使用され、多くの外国人留学生が学んだ。平成12(2000)年、同法人の解散に伴い深谷市に帰属した。

「中の家」は昭和26(1951)年、埼玉県指定史跡「渋沢栄一生地」となり、昭和58(1983)年、埼玉県旧跡に指定替えされた。平成22(2010)年、主屋を中心とした範囲が旧渋沢邸「中の家」として深谷市指定史跡となる。

屋敷外の北東には、栄一の雅号「青淵」の由来となった淵の跡に「青淵由来之跡」の碑が立つ。南方200mほどには、この地、血洗島の鎮守である諏訪神社があり、「渋沢青淵翁喜寿碑」が立つ。



「中の家」を後世に残すために



大黒柱周りの耐震補強の様子



屋根に施された化粧漆喰



屋根化粧漆喰施工

上棟から120年以上を経た主屋を未来へと遺し伝えていくため、令和元年度に着手した整備が、令和5(2023)年4月末に竣工した。プロポーザル方式による厳正な選考を経て、設計・施工を一体的に担ったのは、栄一にゆかりの深い清水建設で、文化財としての価値を保ちながら耐震安全性の向上が図られた。

整備では、耐力壁の集約配置や腐朽部材の交換、新たな基礎の打設、補強金物の設置を行い、渋沢国際学園時代に大きく改築された北側部分には渋沢栄一アンドロイド・シアターを設置した。さらに、資金の一部をクラウドファンディングにより集めて葺き替えた屋根は、化粧漆喰と寄附者の記名瓦を冠して完成した。



確認された煉瓦製カマド跡を保存

渋沢栄一 アンドロイド・シアター

渋沢栄一アンドロイドと映像を組み合わせたイマージブ(没入型)シアター。帰郷した80歳代の栄一が語る、ふるさと血洗島や仲間との思い出などを聞くことによって、親しみながら「中の家」そして渋沢栄一のふるさとを体験出来る。

